

〈奥〉の風景

— 日本古典文学にみる「すまい」の建築論 —

福井工業大学 川本 豊

「住居（建築）」をめぐる問題は、物理的なハード面と精神的なソフト面の両義的視点が必要不可欠であり、建築学を大きく超えて家政学・民俗学・歴史学・地理学・思想史学など学際的探究の立場から、国内外にて現在まで遂行されている。

本研究は、日本人の「すまうこと（住居観）」の建築論的究明をめざす新たな試みとして、日本古典文学作品をテキストに敢えて扱うことを目論むものである。そこに、心身一如とする東洋的な身体論をふまえた「住まい感覚」、日本語独自のニュアンスをもつ「奥」、あるいは中世をピークとする日本人の心性としての「冥一翫」世界イメージなどの視点を含んだことが、本研究の今一つの独自性と考えている。

さらに本研究の基本的立場が、「建築論の京都学派」と称される京都大学建築学科の知的原風景として武田五一を基とし、分離派のメンバーの一人であった森田慶一による構築を経て、やがてその継承者として理論展開の中心的存在となる増田友也（1914-1981）から、田中喬（1934-2018）へと繋がる「風景（なるもの）」の思索に拠ることを強調しておきたい。

本論では、日本の住まいにおける壁（仕切り）の問題、あるいは死生観の変化つまりは聖性（象徴性・超越性）を持ち得なくなったとも思われる現在の住居の実相を問題意識としつつ、増田友也の独特な「壁－隔離」（半－隔離ともいわれる）に関する初期の論考から、さらには、その高弟である田中喬の独自の視座となる「うつす」（写す、映す、移す）という言葉に促されて、「家」の考察から、やがてそこに「すまうこと」の現象について、そしてその「風景」へと展開したのである。新たなキーワードとして、日本的な「奥」という言葉の内に含まれる空間性ととともに時間性にも着目しつつ、また、近代以降これまで看過されてきたが、近年頻発した未曾有の大災害を一つの契機として、学際的な研究対象として再びクローズアップされている「冥一翫」世界構造をも取り上げた。

具体的な研究方法としては、日本古典文学作品をテキストとして、その作品の読解・分析を通して、さまざまな時代における「住まい」の様態、あるいは「すまうこと」という現象や精神史（心性史を含む）、さらにはその風景なるもの、総じていえば建築的な事象についての建築論的考察を試みた。

つまり、文学作品の中に表出される言葉（文字）による何気ない（日常的な）表現に現れ出る深層レベルの心性を抽出し、そのフィルターを通して、表層の形態を再照射することによって、失われつつある「住まい」が本来持っていた象徴性（聖性）を再浮上させることができるのではないかという観点に立ち、その試掘の初発と位置づけて、この原論としての視点に工学的な意義を見出せると考えたのである。

・奥の視点による「看取りの場所」—『讃岐典侍日記』(上巻)より—

院政期の女房日記文学『讃岐典侍日記』をテキストに取り上げ、先述した「奥」の視点から、寝殿造内の天皇の居所がやがてその病床となり、さらにはそこが「看取りの場所」へと至るプロセスの場所論的考察を行った。

まず、天皇の看取りの記とされる、同日記・上巻をテキストに、発病から崩御までの時系列に沿いながら、そこで展開される「看取りの場所」の現象について、「奥」の視点をふまえて、作者と天皇との関係性を中心に空間論的考察を行った。

またそこに表象される「被く(かづく)」という行為の現象に着目した。これは、自分が着ていた上着をすっぽり被って、自らの姿を見えなくする行為を意味する。自分の姿を隠す、あるいは見えているけれども、見えないものとする相互了解とでもいう現象である。なおこの時代の文献記述に、「被く」行為が数多く確認されることから、ある程度日常的に常態化していた現象であることが推察できよう。

・「見る」をめぐる—『十訓抄』を中心に—

前の「被く」に関わりが深いと考えられる「見る」という現象に着目した。使用テキストは、中世鎌倉期の訓話集とされる『十訓抄』である。「被く」ことで見えなくなる、あるいは見えないものとする、つまり「見る」あるいは「見える」ことの現象について、古代の「見る」をふまえつつ、先述した「冥一顯」世界イメージを含めて、ここで敢えて考察することにより、「見る」をめぐる建築論的射程をいっそう鋭意に洞察することが出来た。これはさらに、次の「風景」への視点と繋がるためでもある。

・「すまうこと」とその風景をめぐる

「すまうこと」の3つの様態とその風景なるものをめぐって、すなわち住まいに住まうことと「住」、旅に住まうこと「不住」、漂泊に住まうこと「非住」に3分類し、それぞれに表出される風景現象について考察した。テキストとして、「住」には北陸福井の歌人である「橘曙覧」の歌集を、「旅」には鎌倉期の紀行文学『海道記』を、「漂泊」には幕末の俳人である「井上井月」の句集をそれぞれ使用した。(なお今回は時間の配分上、「旅」の具体的考察部分は割愛した。) ここで定位した3様態を通して、人が生きることから住まうことの実相としての風景なるものの一端が、新たに建築論的に究明されたのであり、従来の住まうことの視座を一段と深化させたといえよう。

以上のように日本古典文学のテキストを通した新しいアプローチによる考察から、古代から中世、近世へと至る日本人の「すまうこと」における壁(仕切り)の象徴的機能や、看取りの場所性、一つの行為(ここでは「被く」あるいは「見る」こと)が開く現象の意味、さらには住まうことの本質に通じる「風景なるもの」の一端を、所謂「建築論の京都学派」とりわけ増田友也と田中喬の思索に依りつつ、本研究独自の視座から明らかにした。

よって本研究の学術的意義は、「建築論の京都学派」の思索を、現代へ発展的に継承することの一助となったことにあると考えている。